



質の高さが際立ち、関心を集めた「フォトサミット in Sendai 2020」

当協会と河北新報社が連携、内容を一新した宮城県芸術祭写真公募展「フォトサミット in Sendai 2020」が芸術祭開幕に合わせて、9月26～29日の日程で、せんだいメディアテークを会場に開かれた。県外

# 公募展、確かな一歩 想定上回る応募者数 作品の質も期待以上

「フォトサミット in Sendai 2020」

からの応募者もあり、参加者は想定を大きく上回った。秀逸な作品も多く、東北を代表する写真公募展へ、確かな一歩を記した。フォトサミットは、従来の県芸術祭写真公募展を存続展として河北写真展と一体、統合させる形で企画。芸術文化団体及び実働主体の写真芸術家と、公募展開催の実績が豊富なメディアアタッグを組み、「みちのく写真新時代」を目指し、実施した。河北新報の広報効果にも支えられ、第1回連携展の反響は県内外に広がり、応募者は想定の数より大きく上回る350人（1614点、第1・自由部門1257点、第2・東北の音部門357点）に達した。



公益社団法人  
宮城県芸術協会  
(郵便番号 980-0802)  
仙台市青葉区二日町16-1  
二日町東急ビル5-B  
電話 (022) 261-7055  
FAX (022) 214-5184  
E-mail: miyagi-geikyo@sunny.ocn.ne.jp  
発行者 零石 隆子

題号の背後にある芸協のシンボルマーク「雲」は、様々な分野の芸術家達がふんわり集まり、巻雲のように盛り上がりつつ纏まった姿を表す。創設当初の理事安倍郁二氏によるデザイン。

地域別にみると、県内が299人で85%を占めたが、県外も51人に上った。東北5県はもとより、大阪府、京都府など西日本からの応募もあった。前年度の芸術祭写真公募展の約3倍、河北写真展と比較しても色色ない参加者を確保した。

第57回宮城県芸術祭が9月26日、せんだいメディアテークで開催された。宮城の芸術の秋を彩る当協会のメイン事業だが、今秋は新型コロナウイルスの感染が収束せず、緊張感が漂う中でスタート。芸術文化関連催事の中止等が相次いでいて貴重な機会だけに、入場者らは例年以上に熱心に鑑賞していた。

開会式は3密を避けるため、共催8団体の代表ら出席者を絞って実施。一般入場者らとの集中回避へ、式の開始時刻も前倒しした。芸術祭会長兼実行委員長の新井隆子理事長があいさつで「新型コロナウイルスの感染という難しい状況下でも芸術の灯を消

さないとの心意気で開催を決断した」と開催の意義を強調。名誉会長の村井嘉浩知事（代読）も感謝を込めつつ祝意を述べた。

## 第57回芸術祭 緊張の中開催 「コロナ下、備え尽くし」

新型コロナウイルス感染症の拡大で、撮影・応募意欲に水を差されるのではとの懸念もあったが、杞憂だった。作品数とともに、レベルの高さも期待以上。8月7日、東京エレクトロンホール宮城の会議室で行われた審査会は高揚感に包まれ、秀作ぞろいで審査も難航した。審査員を務めた写真家の赤城耕一氏は「視点、技量の確かな作品が多かった。想像以上」と高く評価。今後のさらなる飛躍に太鼓判を押した。佐々木光一

感染予防の一環で、来賓紹介も簡略化し、恒例のテープカットも省略。展示部門・第1期の紹介の後、内覧会に移った。本年度の芸術祭は写真展、写真公募展「フォトサミット in

実行委員長（前執行理事）も「公募展発展の基盤が築かれた」と上々の滑り出しを喜んだ。コロナ禍の下、感染予防への配慮から、搬入、搬出日を確保し、結果的に展示期間が絵画、彫刻、書道、華道と同様、当初予定の6日間から4日間に短縮されたが、その分、間延び感のない充実した展示会になったようだ。密集状態を避けつつ作品を鑑賞していた入場者は「素晴らしい作品ばかりで、見とれてしまいました」と感想を話し、表情に満足感を漂わせていた。

Sendai 2020」絵画展（公募の部）、彫刻展、彫刻公募展で幕開け（26～29日）。その後、絵画展（10月3～6日）、華道展、書道展（10～13日）と続いた。文芸祭は10月24日、東京エレクトロンホール宮城で実施。工芸展、それと河北新報社との連携で新規に取り組む公募展「杜のみやこ工芸展」は11月5～9日にTFUギャラリーミニモリで、また音楽コンクールが明年2～3月に仙台銀行ホールで開催される予定。

感染予防の対応が困難な茶会や、集合しつづの練習がままならず準備が整わない音楽会、長唄演奏会は中止となった。

【絵画展（公募の部）（9月26～29日）】出展は88点。昨年より128点と比べて減少したが、高水準の作品が多かった。写真賞は最高賞、宮城県芸術協会賞受賞作品。作品名は「初夏」。



最高賞受賞作品



開会式

【開会式（9月26日）】共催8団体の代表らが出席した開会式。全員、マスクをつけ、間隔を空けて着席、感染防止に留意した。コロナ禍の下、表情には緊張しつつも満足感が漂った。

# 華やかに



開会式

【開会式】開会のあいさつで、共催団体の理解と協力に感謝しつつ、コロナ下における芸術祭開催の意義を強調する雫石隆子理事長（第57回宮城県芸術祭会長兼実行委員長）。

【彫刻展（9月26～29日）】出展は29点。昨年を上回った。ホワイエへの展示もあり、見せ方の幅が広がった。定番ものを大事にしつつ、斬新な作品もあり、殻を破る意欲がほとばしった。



彫刻展



写真展

【写真展（9月26～29日）】出展は81点。感染拡大に伴う外出自粛の影響か、昨年と比べて若干減少したものの、力作が並んだ。作品の幅も広く、磨き上げられた作者の感性が光った。

【彫刻展（9月26～29日）】最高賞の宮城県芸術祭賞受賞作品。作品名は「こころね」。彫刻の可能性を広げるような作品。素材、造形がユニークで、メッセージ性があふれた。



最高賞受賞作品



最高賞受賞作品

【写真展（9月26～29日）】最高賞の宮城県芸術祭賞受賞作品。作品名は「十二神将 冬の候」。モノクロのような色調の仏像を味わい深く組み上げた。コロナ禍終息への祈りを込めたという。

【彫刻公募展（9月26～29日）】応募は19点、うち14点が入選。展示。高校生が積極応募、昨年の5点から大幅に増えた。写真は最高賞、宮城県芸術協会賞の受賞作品。作品名は「生命」。



最高賞受賞作品



最高賞受賞作品

【フォトサミット in Sendai 2020（9月26～29日）】応募点数1614点のうち入選146点を展示。切り口の新鮮さが目を引いた。写真は大賞受賞作品「メルヘンの世界」。

【絵画展（10月3～6日）】出展は276点。昨年を若干、下回ったが、力作が目立った。コロナ禍で公募展の多くが中止になったことも、「一点集中型」の一面とみられ、鑑賞者をうならせた。



絵画展



華道展

【華道展（10月10～13日）】出展は前期、後期合わせて20点。コロナ対策で出展数を抑えたため、昨年の68点から大きく減少した。寂しさは否めないが、1点1点の迫力、華やかさは十分。

# 美の競演



書道展

【書道展（10月10～13日）】出展は247点。昨年の285点に比べて若干減少したが、自粛ムードの中ではまずまずの点数。例年通り、気持ちのこもった秀作が会場を埋めた。

【絵画展（10月3～6日）】最高賞、宮城県芸術祭賞受賞作品（日本画）。作品名は「宵の音」。昨年の公募の部での入賞に続く、入会1年目での快挙。確かな実力を見せつけた。



最高賞受賞作品

【絵画展（10月3～6日）】最高賞、宮城県芸術祭賞受賞作品（洋画）。作品名は「掌中の珠」。日本画同様、公募の部での入賞に続く、入会1年目での栄誉。繊細で若々しい感性が光った。



最高賞受賞作品



最高賞受賞作品

【書道展（10月10～13日）】最高賞、宮城県芸術祭賞の受賞作品。作品名は「劉滄詩（漢字）。コントラストが素晴らしく、流れも鮮やか。上質な作品に仕上がった。

## 芸術祭開催を評価 感謝の声が続々と 入場者対象にアンケート

当協会は「第57回宮城県芸術祭」の展示会場で入場者らを対象に、芸術祭開催の評価を問う

アンケートを行った。その結果、新型コロナウイルス禍の下での開催を評価する感想が大半を占め、内容についても好意的な回答が寄せられた。開催が困難視される中、感染予防の措置を講じつつ開催に踏み切った対応が熱く支持された形だ。

アンケートは、展示系の開催に合わせて、せんだいメディアテークの会場出入口付近に用紙を置いて、帰る際、記入してもらう方式で実施。136人から回答を得た。非会員の一般入場者が117人でほとんどだった。それによると、開催に踏み切った判断・対応について、「適切」との回答が116人で、大半が評価。その理由については、86人が「芸術文化活動の中止・延期が相次ぐ中で貴重な鑑賞機会の提供となった」と回答した。

自由記述欄では「文化的な展示は心の栄養になる」「コロナ下、開催の決断に感謝します」「感染防止策も取られており、不安なく鑑賞できた」といった勇気付けられる意見が目立った。多くの入場者らにコロナと向き合い、防止策を尽くしつつ、災禍を乗り越え芸術振興に努めようとする協会及び会員の志の高さが伝わった印象だ。

一方、展示の在り方や出展数、審査内容に関わる指摘もあり、今後、運営の参考にしたい。

【訂正】はなやま225号、3面に掲載の記事で61～62行目、「河北工芸展から引き続き」の務めることになるは「河北工芸展でも顧問を務めていた」の誤りでした。

才能に恵まれた人だ。20 年前に彫刻（仏師）の世界を知り、直感で一生の仕事にと思い定め、その後間もない 2003 年、河北美術展で仙台市長賞を初受賞。以降、東京での創型展を含め十数回の受賞を重ねるのだから。



小林鳳雲氏、その後現在の及川茂氏に師事。華々しい活躍におごることなく、揺るぎない初心で精進を続ける。

### 後の世代につなぐ

彫刻部 赤井靖武さん（塩釜市）

目標は「師に近づき、技術を向上させ、後の世代へとつないでいくこと」ときつぱり。刃物を研ぐとき、己の心も磨くものとの教えを貫く。「まともに研げるようになったのはせいぜい最近」と謙遜。「木材の小さな変化を見

逃さず、木目を見てどのように使うか決めていく」と、素材に誠実に向き合う。07 年に出身地の塩釜市の自宅に工房を構え、寺院等の菩薩の制作、修復などを行い、仏像彫刻の講師も務める。日本の木彫文化の先行きを危ぶむ。現在、仏像彫刻に本格的に取り組みのは全国でも数人。光を当て直す必要性を痛感する。

44 歳。今後、長く木彫の世界を背負っていく俊英。運営委員として芸術祭の彫刻展を支え、10 月には地元で個展を開催した。能力、意欲に満ちた彫刻部の頼もしい若き担い手だ。

## 協会の未来

### 「若手」登場

社会人になって早々、友人に誘われたのがきっかけだった。「いいものに出会った」というのが華道の第一印象。引き寄せられ、結婚し乳児を抱えた折も変わらず足は向いた。「創作に際限がないのが魅力」。花材のひとつ、いち輪を、どう活かして生けるか、想像と創造の世界に没頭すること、心に安らぎとゆとりが生まれ、楽しさに続くのだという。



婚し乳児を抱えた

### 楽しさ満載を実感

華道部 児玉純紅さん（仙台市）

米沢市出身の 50 代。芸術祭の華道展では非会員にも活け込み（作品作り）を手伝ってもらい、楽しさを共有しつつ、さりげなく入会を促しているとか。中堅、実働世代として部を支え、派を盛り立てる思いがあふれる。

ことを学んできたとも。入会は 2013 年。所属する龍生派で芸協を担当したのが縁となった。「さまざまな会員との交流が創作意欲をかき立て、ジャンルの異なる芸術家の皆さんと集う素晴らしさも知った。合作の機会も刺激的だそう

「欲張りな性格」があった。そのことが、県華道連盟の事務局員などお世話役を積極的に引き受ける。派主催の子ども体験教室にも協力。活動は多岐にわたる。

## 持続化給付金を受給

### 上限の 200 万円・申請承認

新型コロナウイルスの感染拡大に伴って、収入が大きく減少し、経営・運営に著しい影響を受けている中小企業や NPO を対象に、事業の継続を支える持続化給付金で、当協会は 9 月、中小企業庁・給付金事務局に給付を申請した。8 月に送付した

入力情報および証拠書類等に不備があるとの指摘を受け、2 度の修正を伴ったが、審査の結果、最終的に制度の趣旨にかなうとして給付が認められた。給付額は上限の 200 万円。制度の趣旨を踏まえて、確定申告書類、対象月の売上台帳（正

味財産増減計算書）、通帳のコピー等を提出し、9 月、給付通知「持続化給付金の振り込みのお知らせ」が届いた。新型コロナウイルスが広がりはじめた今冬以降、当協会は音楽コンクールやスケッチ研修会等の事業が相次いで中止となり、収入が見込めなくなつた。その分、支出も抑えられ、著しく収支が悪化したわけではないが、持続化給

付金制度は収入の減少額だけを基準としており、特定の 1 カ月の状況を基に収入減を年額に換算、給付額を算定した。契約をしている税理士法人の助言を受け、制度の趣旨を逸脱することのないよう留意しつつ、申請に踏み切つたもので、今後の事業の継続と新たな企画の構想・実現に向けて、支えとなる貴重な財源を得た形だ。

給付金は、9 月 25 日に仙台銀行の口座に振り込まれた。後日、寄付金専用口座に設定した三菱 UFJ 信託銀行仙台支店の口座に預け替える予定だ。

## 奨励金も認定 20 万円、事業資金に充当

公益財団法人日本教育公務員弘済会宮城支部に申請していた活動奨励金の給付が 9 月、正式に決まった。8 日付で決定通知書が届き、10 月 5 日、当協会事務所内で目録の贈呈式が行われた。奨励金の認定は、芸術分野での活動が評価されたもので、給付額は 20 万円。芸術祭事業に組み込み、有効に活用される。

新型コロナウイルスの感染拡大に伴って、芸術文化関連の事業が相次ぎ中止に追い込まれる中、感染防止に努めながら、第 57 回宮城県芸術祭の開催を決断した「勇氣ある対応」が助成に値する特筆すべき対応と受け止められた。

宮城の芸術文化の振興に向けて、愚直に積極的に取り組むこととの意義とともに、活動ぶりを広く社会にアピールすることの重要性について再認識させられる貴重な機会にもなった。

第 57 回宮城県芸術祭受賞者 (会員の部)

賞 名	部 門	作 品 名	氏 名
宮 城 県 芸 術 祭 賞	写 真 部	十 二 神 将 冬 の 候	白 旗 成 典 (大崎市)
	彫 刻 部	こ こ ろ ね	しょうじ こそえ (山元町)
	絵 画 部 (日 本 画)	宵 の 音	山 本 政 彰 (仙台市)
	絵 画 部 (洋 画)	掌 中 の 珠	佐 藤 結 (仙台市)
	書 道 部	劉 滄 詩 (漢 字)	菅 原 紫 雲 (仙台市)
	文 芸 部	コ ロ ン ブ ス の 卵 (川 柳)	水 戸 一 志 (利府町)
宮 城 県 知 事 賞	写 真 部	じ ょ ん が ら	小 野 茂 (仙台市)
	彫 刻 部	ク ロ ス	小 泉 百合子 (多賀城市)
	絵 画 部 (日 本 画)	遠 雷	遠 州 千 秋 (仙台市)
	絵 画 部 (洋 画)	荒 沢 湿 原 の 花	和 田 三 夫 (仙台市)
	書 道 部	竹 の 色 も (か な)	岡 崎 幸 子 (仙台市)
	文 芸 部	色 褪 せ て / な お (詩)	鈴 木 修 (大崎市)
	文 芸 部	秋 霖 (短 歌)	鈴 木 啓 子 (仙台市)
	文 芸 部	数 の ち か ら (俳 句)	堀 之 内 久 子 (利府町)
仙 台 市 長 賞	文 芸 部	莫 蔭 の 上 (川 柳)	大 沼 和 子 (仙台市)
	書 道 部	孤 坐 (近代詩文)	小 嶋 カズ子 (仙台市)
	絵 画 部 (日 本 画)	或 る 日 の 庭	中 邨 圭 子 (仙台市)
河 北 新 報 社 賞	絵 画 部 (洋 画)	生 命 譜 (2020)	渡 邊 昭 硯 (仙台市)
	写 真 部	産 土	海 老 名 和 雄 (仙台市)
	彫 刻 部	I t ' s s h o w t i m e	中 平 哲 夫 (仙台市)
	絵 画 部 (日 本 画)	叢 生	土 屋 薫 (仙台市)
	絵 画 部 (洋 画)	青 色 の コ コ ロ	松 宮 祭 典 (仙台市)
宮 城 県 教 育 委 員 会 教 育 長 賞	書 道 部	悟 (少 字)	和 泉 とし子 (仙台市)
	文 芸 部	ド ロ ー の 人 生 (短 歌)	大 友 圓 吉 (多賀城市)
宮 城 県 教 育 委 員 会 教 育 長 特 別 賞	絵 画 部 (洋 画)	都 市 遊 戯 X ク ロ ス ロ ード	山 並 進 (角田市)
	書 道 部	ね が い 星 (墨 象)	伊 澤 香 雨 (石巻市)
仙 台 市 教 育 委 員 会 教 育 長 賞	絵 画 部 (日 本 画)	ひ と り の 夏	阿 部 淑 子 (塩釜市)
	絵 画 部 (洋 画)	留 ま る も の は 何 も な い (20)	阿 部 正 彦 (気仙沼市)
	書 道 部	「懿 徳」「絶 學 無 憂」(篆 刻)	伊 藤 煌 容 (多賀城市)
宮 城 県 議 会 議 長 賞	書 道 部	石 牟 礼 道 子 の 句 (近代詩文)	大 友 き か 子 (名取市)
	絵 画 部 (洋 画)	明 日 は 晴 れ	柏 谷 佳 代 子 (石巻市)
仙 台 市 議 会 議 長 賞	書 道 部	岡 本 黄 石 詩 (漢 字)	山 田 華 鳳 (松島町)
	絵 画 部 (洋 画)	風 の ポ エ ト リ ー	佐 野 福 代 (仙台市)
公 益 財 団 法 人 宮 城 県 文 化 振 興 財 団 賞	書 道 部	心 の 軌 跡 (墨 象)	一 條 紅 蕭 (涌谷町)
	書 道 部	変 貌 (少 字)	柴 田 治 (仙台市)
	写 真 部	反 映 の 形 象	鳥 津 和 子 (岩沼市)
	絵 画 部 (洋 画)	青 い 布 の あ る 静 物 Ⅲ	山 内 則 義 (仙台市)
公 益 財 団 法 人 仙 台 市 民 文 化 事 業 団 賞	書 道 部	舒 位 詩 (漢 字)	佐 々 木 ま さ 子 (仙台市)
	書 道 部	鎮 魂 の 花 火 (近代詩文)	後 藤 翠 蓮 (栗原市)
	書 道 部	坂 井 智 子 の 言 葉 (近代詩文)	建 部 紘 子 (多賀城市)
	文 芸 部	夜 を 急 ぐ (短 歌)	佐 藤 華 炎 (仙台市)
	写 真 部	夏 の 思 い 出	柿 沼 寿 子 (名取市)
公 益 財 団 法 人 カ メ イ 社 会 教 育 振 興 財 団 賞	絵 画 部 (日 本 画)	夏 の 思 い 出	西 條 き み 子 (仙台市)
	絵 画 部 (洋 画)	感 激 の 輝 き	菊 地 禮 蔵 (仙台市)
	書 道 部	街	山 口 優 子 (名取市)
菅 野 美 術 館 賞	書 道 部	彭 孫 逸 詩「秋 日 登 滕 王 閣」(漢 字)	田 手 邦 泉 (仙台市)
	絵 画 部 (日 本 画)	伊 太 利 回 想	武 地 美 枝 子 (仙台市)
門 伝 勝 太 郎 賞	絵 画 部 (洋 画)	い ざ な う	大 西 ち い 子 (仙台市)
	彫 刻 部	H i n o m a l u 2 0 2 0	畠 山 卓 也 (登米市)
宮 城 県 芸 術 祭 奨 励 賞	絵 画 部 (洋 画)	冬 の お と ず れ	鈴 木 雅 之 (大河原町)
	書 道 部	寂 寥 (近代詩文)	木 村 笙 園 (大崎市)
	写 真 部	*水のように*シリーズ 8月15日撮影から。故大内四郎氏に捧ぐ	伊 藤 ト オ ル (仙台市)
	写 真 部	古 里 の 笑 顔	兵 藤 博 行 (栗原市)
	絵 画 部 (洋 画)	A p p l e A v e n u e	桜 井 竣 平 (仙台市)
	絵 画 部 (洋 画)	花 (Ⅲ)	大 竹 幸 子 (仙台市)
	絵 画 部 (洋 画)	モ オ ~ や め て !	山 形 牧 子 (登米市)
	書 道 部	葉 颯 詩 (漢 字)	石 井 秀 苑 (仙台市)
	書 道 部	范 準 詩 (漢 字)	板 橋 翠 苑 (仙台市)
	書 道 部	眼 施 (少 字)	丸 藤 紫 苑 (仙台市)
	書 道 部	大宮エリーの詩「オーロラのような」(近代詩文)	下 野 美 紀 (塩釜市)
	書 道 部	尤 衰 詩「落 梅」(漢 字)	末 野 瑞 鳳 (東松島市)
	書 道 部	韮 紗 あ そ び (墨 象)	田 村 紅 沙 (美里町)
文 芸 部	四 国 巡 礼 (俳 句)	赤 間 学 (仙台市)	

※工芸部の受賞者は11月決定の予定

第 57 回宮城県芸術祭 絵画展 (公募の部) 彫刻公募展 フォトサミット in Sendai 2020 受賞者

部 門	賞 名	作 品	名 氏 名
絵 画 展 ( 公 募 の 部 )	宮城県芸術協会賞	初 夏	澁谷 いく子 (仙台市)
	優 秀 賞	初 秋 の 思 い	出 高 橋 大 策 (仙台市)
	優 秀 賞	黒 い テ ー プ	ル 松 本 俊 隆 (仙台市)
	奨 励 賞	真	昼 小 野 寺 さ ゆ り (栗原市)
	奨 励 賞	望	郷 中 島 信 也 (加美町)
	奨 励 賞	石 橋 屋 の 枝 垂	桜 堀 英 敏 (仙台市)
	奨 励 賞	追 憶 の 部	屋 小 山 ま り (仙台市)
	奨 励 賞	咲 い た よ	三 村 敦 子 (仙台市)
	奨 励 賞	追 憶 ( 仲 良 し マ ネ キ ン )	赤 塚 昭 (仙台市)
	奨 励 賞	企	て 成 田 太 郎 (仙台市)
彫 刻 公 募 展	宮城県芸術協会賞	生	命 木 村 民 男 (石巻市)
	奨 励 賞	社 会 不 適 合 者	中 野 優 音 (仙台市)
フ ォ ト サ ミ ッ ト i n S e n d a i 2 0 2 0	フォトサミット in Sendai 大賞	メ ル ヘ ン の 世 界	藤 原 靖 也 (仙台市)
	河北新報社賞	古 き 日 本 の 伝 統 美	伊 藤 邦 彦 (登米市)
	宮城県知事賞	「 い び き 二 重 唱 」	狩 野 庸 志 (大崎市)
	青森県知事賞	桜 花 一 閃 の	矢 相 沢 開 (石巻市)
	秋田県知事賞	会 場 目 指 し	て 佐 藤 一 之 (塩釜市)
	岩手県知事賞	ヨ シ 原 の 恵 み	を 一 條 待 子 (仙台市)
	山形県知事賞	凍 ゆ る	む 平 田 勉 (岩沼市)
	福島県知事賞	乱 痴	気 錦 見 寛 信 (福島県)
	仙台市長賞	雪 中 田 植 え	伊 藤 公 博 (仙台市)
	宮城県教育委員会教育長賞	セ ル フ ポ ー ト レ ー ト	阿 部 和 美 (多賀城市)
	仙台市教育委員会教育長賞	陸 ま じ	く 池 上 和 夫 (福島県)
	宮城県議会議長賞	祈 り	飯 淵 弘 (仙台市)
	仙台市議会議長賞	刻 ま れ た 年 月	松 浦 昭 宏 (静岡県)
	(公財)宮城県文化振興財団賞	大 地 へ 還 る	清 原 一 彦 (仙台市)
	大崎市長賞	防 潮 堤 か	ら 伊 藤 敏 明 (仙台市)
	J A L 賞	時 の 表 出	小 檜 山 裕 行 (角田市)
	東北電力賞	喜 び の 日 の 馬	子 星 み や 子 (仙台市)
	東北放送賞	朝 の 詩	鈴 木 泰 壽 (塩釜市)
	ニコソ賞	朝 日 に 詩 う	森 川 隆 (大崎市)
	ペンタックス賞	一 緒 に 食 べ よ	っ 遠 藤 祐 子 (仙台市)
	堀内カラー賞	カ ム	イ 北 原 良 章 (加美町)
	tcd 東北カラーデュープ賞	厳 寒 に 耐 え て。	竹 花 信 一 (岩手県)



フォトサミット in Sendai 2020 写真シンポジウム

充実の討議、会場に熱気  
写真シンポジウム

フォトサミット in Sendai 2020 の関連事業、写真シンポジウムが 9 月 26 日、せんだいメディアアテークのスタジオシアターで開かれ、約 30 人が参加した。当協会と河北新報社連携による第 1 回公募展に合わせて企画された。当協会理事で写真家の



フォトサミット部門 2・東北の音の最高賞、河北新報社賞の受賞作品「古き日本の伝統美」

今回のコンクールについて、各氏が冒頭「質の高さに驚いた。『東北の音』部門の設定もユニーク。視点、感性の豊かさが試され、(この種の部門を) 次年度以降も継続してほしい」と口をそろえた。シンポは予定を上回る 2 時間半、休憩もなく実施。検温や座席数の減少など感染防止にも配慮しており、参加者からは「不安もなく、専門家ならではの興味深い話が多くて参考になった」といった感想が聞かれた。

腕山氏が「傑作を生み出す条件とは」をテーマに意見を述べ合った。パネリストは写真をはじめ芸術全般に造詣が深く、場慣れしているだけに、議論はスタートから白熱。豊かな経験に裏打ちされたエピソードもふんだんに盛り込まれ、機材・レンズの批評や参加者との質疑もあり、充実した内容になった。

落合英俊氏の司会・進行で、審査を務めた写真家の赤城耕一氏、TV プロデューサーの大野克己氏、当協会執行理事の邦楽家(尺八)の佐藤

# 宮城県芸術選奨に3氏、新人賞に1氏 輝く業績、評価も高く

宮城県芸術祭を受賞するなど、県内外の絵画展で高い評価を得ている。公共施設での壁画制作も。発想が豊かで作品は変遷を続け期待が膨らむ。長年、東北生活文化大で学生の指導に尽力。美術解剖学会理事、新現美術協会会員。絵画部運営委員。



森 敏美氏  
美術 (洋画) 仙台市

## 海外個展を目標に

受賞に驚いています。カルチャー教室やワークショップなどの社会活動、それと昨年開いた大学の退任展が評価されたのでしょうか。これから子どもたちやお年寄りに絵画の楽しさを伝える取り組みとともに、コロナ禍の先を見据え、ドイツでの個展開催を目標にし、初心に振り返り創作を続けたいと思います。

絵画 (洋画) と工芸 (陶芸) の両部で実績。絵画は河北美術展で高く評価され、工芸は日展、新工芸展で入選し、河北工芸展でも入賞・入選を重ねる。秋保に築窯、後進の指導に当たり、個展を通じて芸術文化振興に貢献。絵画 (運営委員)、工芸重籍会員。



小川和子氏  
工芸 (陶芸) 仙台市

## 新たな挑戦を模索

長年の積み重ねが認められたようで、うれしい気持ちです。ばいばい。絵画は河北美術展など地元展、工芸 (陶芸) はシンプルで見栄えを意識し大作を全国公募展にも出品してきました。評価はただいた工芸について、好きな角張ったものに加え、新たに丸み

令和2年度の宮城県芸術選奨受賞者が決まり、12月に県庁舎内で授賞式が行われる。受賞者は芸術選奨5人、同新人賞5人。当協会の会員、美術 (洋画) の森敏美氏、工芸 (陶芸) の小川

音楽美学から指揮に転向。山形交響楽団の指揮者を務め、これまで仙台フィルハーモニー管弦楽団、東京フィルなど国内外の楽団を指揮。オペラ指導など幅広い分野での活躍も期待される。国立音楽院宮城キャンパス等で学生の指導にも尽力。



佐藤寿一氏  
音楽 (指揮) 名取市

## 軸足をより県内に

青天の霹靂、驚いています。県内での実績が十分ではなく、もっと地元で軸足を置いた活動を心掛けたいと思います。周りには優秀な楽器奏者が大勢いますが、意外に知られていないようです。そうした方々との演奏機会を得て、子どもたちをはじめ多くの皆さんに音楽の楽しさを伝えていこうと考えています。

和子氏、音楽 (指揮) の佐藤寿一氏が芸術選奨、美術 (書) の千葉四帆氏が同新人賞に輝いた。県の芸術文化の発展に尽力され、協会の活動も支える皆さんの業績と喜びのコメントを紹介する。

若くして河北書道展で相次ぎ河北賞に輝き、書道芸術院展など全国展でも入賞多数。前衛書 (墨象) を得意とし、現代的な作風で高い評価を得ている。他部門とのコラボにも積極的に活動の幅を広げ、書道部の運営委員を引き受けるなど後進の指導も。



千葉四帆 (知子) 氏  
美術 (書) 仙台市

## 地道に精進重ねる

何が評価されたのか、受賞に恐縮していますし、ありがたく思っています。個展の開催も少ない方なのに、体調を崩して現在、充電中のような格好ですが、回復を見定めつつ、これまでを振り返り、今後もおれずじままに精進していきたいと思えます。「墨象」の楽しさを伝える活動にも尽くしていくつもりです。

## 文化の日表彰受賞者に会員4名

令和2年度の文化の日表彰受賞者 (教育文化功労) が決まった。芸術・文化関係で長年、多大な貢献をした10名の方々に、当協会からは杵屋和加喜久さん (長唄、邦楽部長) 仙台市、岩井純さん (陶芸) 同、佐々木洋一さん (詩、文芸部運営委員) 栗原市、伊藤翠華さん (華道・池坊) 七ヶ浜町、の4名の会員が選ばれた。

杵屋さんは長年、部をけん引。三味線界の重鎮で各公演のほか邦楽体験ワークショップなどに協力、継承に努めている。

岩井さんは仙台市内に築窯。各種の陶芸展で入賞・入選を重ね、国内外で個展を開催するなど、活躍が際立っている。

佐々木さんは詩集を多数出版。宮城県芸術選奨、県芸術祭文芸賞を受けるなど県内文芸界を支える一人。壺井繁治賞も受賞。

伊藤さんは昭和49年、池坊入門。その後、教室を主宰し、宮城県華道連盟等の会員として後進の指導と普及に尽力している。

11月24日に行われる予定の第57回宮城県芸術祭の表彰式で披露される。

寄付金専用口座を開設

周年記念等の企画事業に充当

会員の積極参加を期待

前号 1 面に掲載した雫石隆子理事長の再任あいさつで触れている通り、寄付金専用の口座を開設した。既設の三菱UFJ信託銀行仙台支店の普通口座を「寄付金専用」に改めた。宮城県芸術祭とは別に今後、想定される周年記念事業への支出や、協会のさらなる発展に向けた企画事業等の元手として役立てるのが狙いで、基金の受け皿的な性格を持つ。会員らの理解と積極支援をお願いしたい。

協会創設 60 周年を 3 年後に控え、記念事業の立案・実施と、その資金の積み立てに迫られる状況に加えて、取り巻く環境の変化を踏まえ、協会の存在を広く社会にアピールするための企画事業等に備えるのが目的だ。行政や団体、企業との連携事業の実施に向けて、適宜、負担金等の拠出にも充当する。予備費といった形で予算計上するのも一つの方法だが、赤字決算が続く厳しい財政状況を直視し、会員をはじめ、賛助会員や県民らに浄財の提供をお願いすることにした。積立額次第の

事務局日記

会務報告

【第 3 回理事会】8 月 3 日  
・正会員の入会承認について  
・賛助会員の推薦について

後援

- ☆東北書道秀抜展 10 月 16 ～ 20 日
- せんだいメディアアテーク
- ☆第 59 回洗心書道展 11 月 12 ～ 15 日
- 宮城県美術館
- ☆圖南書道選抜展 11 月 13 ～ 18 日
- せんだいメディアアテーク
- ☆第 67 回河北書道展 11 月 19 ～ 30 日
- T F U ギャラリーミニモリ
- ☆第 44 回一般社団法人二科会写真部東北地区公募展 12 月 4 ～ 8 日

額控除の対象となる。口座名義は「公益社団法人 宮城県芸術協会」、取扱店は「340」、口座番号は「2365427」。

第 57 回芸術祭表彰式 市民会館に会場変更

第 57 回宮城県芸術祭表彰式の会場を変更した。総会議案書の事業計画や芸術祭実施要項ではホテルメトロポリタン仙台としていたが、トークネットホール仙台（市民会館）小ホールに切り替えた。

- せんだいメディアアテーク
- ☆第 27 回一般社団法人二科会写真部宮城支部展 12 月 4 ～ 8 日
- せんだいメディアアテーク
- ☆第 38 回メサイア演奏会（抜粋演奏）12 月 12 日
- 仙台教区元寺小路カトリック協会
- ☆第 48 回宮城野書道展 12 月 18 ～ 23 日
- せんだいメディアアテーク
- ☆わらび座ミュージカル「ジパング青春記」12 月 22 日
- 東京エレクトロンホール宮城
- ☆第 13 回河北小中学生書道展 12 月 25 ～ 27 日
- T F U ギャラリーミニモリ
- ☆蓮紅社書展 令和 3 年 1 月 15 ～ 18 日
- せんだいメディアアテーク
- ☆ 2021 仙萩会書展

り替えた。新型コロナウイルスの感染が収束せず、式後の祝宴の開催も見送らざるを得なくなったことに伴う措置。期日は 11 月 24 日（火）で変更はなく、開催時間は午後 2 時から。簡素化を図り、出席も受賞者・協会功績者・文化の日表彰者らの協会会員、共催団体の代表者及び賞交付団体代表者、協会役員及び各部長・副部長にとどめる。

会員の入賞・入選など

- 令和 3 年 1 月 30 日 ～ 2 月 3 日
- せんだいメディアアテーク
- ◇第 75 回春の院展
- ▽入選 〓 佐々木啓子、三浦長悦
- ◇再興第 105 回院展
- ▽入選 〓 三浦長悦

受贈書

- 「書業六十年の歩み 阿部圭峰作品集」(佐々木芝翠)、『歌集 記憶の遺産』(上林節江)、『鈴木梅子の詩と生涯』(西田朋)、『詩集ユウレカ! 老人は飛ぶ』(鈴木修)『句集終』(木村裕一)

謹弔

- 賛助会員 (個人) 千葉英司 殿 5 月 31 日
- 文芸部 (短歌) 丹治久恵 殿 8 月 20 日
- 賛助会員 (個人) 愛知絢子 殿 10 月 5 日

けやきの譜

コロナウイルスの感染は、未だ収まらない。ウイズコロナ、アフターコロナと様々な言われ方をしている。新しい生活様式などと生活スタイルまで指示されるが、いづれ人の行動は時間の経過の中で、かつての姿を取り戻していくだろう。この半年余り文化面での打撃は大きく、希望を持てるまでの回復には多くの時間を要すると思われる。本年度の宮城県芸術祭も会期の短縮など、大きな影響を受けたが、創造力は従前以上。巣ごもり消費、ネットゲーム、格差拡大と、コロナの関係でこれまで水面下だった事柄がより顕になった。コロナ下で IT の巨大企業 G A F A (グーグル、アマゾン、フェイスブック、アップル) はぼろ儲け。これらの企業に金儲け以外の使命はない。どこもかしこも拝金主義一辺倒で、富の偏在はさらに大きくなっていく。以前、フランスの経済学者トマ・ピケティが、富裕層の税率を高くするべきだと説いたことがあった。日本の子供達の 7 人に 1 人が、貧困でおなかをすかせているなど、世の中、狂っているから起きる現象ではないか。(英)